「近現代中国における「歴史記憶」の形成過程に関する文化人類学的研究
—陝西省中部地域における烈士記念の事例から—」

Making “Historical Memory ” in Modern China.
-A case study of “Memorial park of revolution” in Shanxi,Xian-

田村和彦

１．はじめに

近年、歴史と記憶をテーマに掲げた研究は、すでに多くの蓄積をもつに至っている。本研究で考察する中国においても、社会史の導入や、行政文書を用いた研究の一般化など従来に比べて詳細な一次資料を利用した近現代史研究の勃興を受けて、文字資料と個人の経験が交差する領域の研究成果が数多く公開されているが、これら過去の出来事もまた今日的な認識のもとで社会的に構成されているという視点に立った研究はまだ多くはない。そのなかで、本稿でとりあげる、中国における烈士記念のあり方について、空間形成的なアプローチから考察したもっともすぐれた先行研究として、王暁葵の研究がある(王:2005)。そこでは、1911 年に引き起こされた黄興ら中国同盟会による清朝への蜂起事件(三・二九蜂起)を記念した広東省の「黄花崗公園」と、中国共産党による国民党政権への蜂起である、1927 年 12 月の広州蜂起の陵園との詳細な比較考察がおこなわれている。その結果、王は、黄花崗事件を記念した公園が、自由の女神のミニチュア像や、中国の伝統的な建造物など豊富な文化的政治的メッセージをもち、周辺に広州蜂起と関係のない墓地すら引き寄せながら記念化されてきたのに対し、広州起義烈士陵園は、

> すべて中国共産党に一元的に組織、管理され、陵園の資金、デザイン、建設などのすべてにおいて個人、地域社会、民間団体などが最初から排除されていた。事件の性質も共産党の「革命歴史」観により解釈され、固定された。党のイデオロギーが主導する歴史認識をいかに具現化するかが、陵園建設の指針となった(王:2005、266)。

と位置付けている。2002 年に、筆者も同地点を調査したが、ほぼ同様の結論を得ており、ここでの議論が、近現代中国における烈士をめぐる一般的な歴史表象の空間化と捉えてよい。

しかしながら、黄花崗公園が、反封建武装の蜂起として、共産党の歴史観のなかで一定の地位を与えられ続けた、いわば「正統」で意味の安定した事件を記念する公園であることに対し、1949 年以降の「あるべき歴史」の参照枠の変化のなかで、従来付与された意味を失い、曖昧な存在となったり、消滅した記念物も数多く存在する。

そこで、本稿では、広州蜂起とほぼ同時期の事件を記念して形成された革命モニュメントであり、現在までその位相を変化させながら維持されてきた公園をめぐって、その意味付けの揺らぎを検討することで、意味の刷新される過程を考察することを目的とする。具

体的には、1926 年に起こった西安籠城戦の記念公園である、革命公園をとりあげることで、先行研究を相対化し、「革命」をめぐる記憶についての考察をおこなうものである。

そのために、事前の作業として、日常的な意味で用いられる個人の記憶といくぶん重なりつつも、政治化する過程で強調される種類の記憶を便宜的に区別することが有用であろう[1]。本論では、本来、過去から現在に到る経験への認識である記憶に対して、集団が意識することを求められ、全体から切り離されて突出した形で意味を与えられ、繰り返される式典などの実践や文字や記念物といった形態で表現されるような、未来に向かって自他の行為を制御、操作することが期待される記憶のありかたを「歴史記憶」と表記する。両者は、明確に異なる二つの種類の記憶として存在するのではなく、部分的に接ぎ木されたり、時間の経過とともに代替されたり、程度を異に作用することが可能なものとして捉えておく。

２．西安籠城戦から墓地形成まで

2－1　西安籠城戦と革命公園の誕生

1920 年代中葉の中国では、各地を軍閥政権が統治する一方で、国民政府による北伐が開始されている。こうした時期にあって、陝西省では、軍閥系の指導者による統治が続いた。なかでも反清闘争から身を起こし、軍閥諸派を転々としつつ、一時は陝西省長の座を得た劉鎮華が率いる鎮嵩軍は、一度は陝西省を離れるものの、1926 年春には再び西進し、西安城を包囲するにいたった。かつて劉鎮華と義兄弟の関係にあった馮玉祥が五原誓師を経て、国民党軍に参加し、援軍として到着するまでの約 8 カ月にわたって西安は孤立し、楊虎城、李虎臣、衛定一らの率いる部隊によって守備された籠城戦を強いられることとなった。長期にわたる籠城の結果、城内は飢饉に陥り、油粕や樹皮まで食されるようになり、冬季を迎えると飢えや病による死者が続出する凄惨な状況が発生した[2]。この籠城戦は、当時の西安の人口の 4 分の 1 に相当する約 5 万人の死者を出した、とされる[3]。この、西安ではしばしば籠城戦の指導者 2 名の名前をとって「二虎守長安」と称される事件の犠牲者が埋葬、祭祀された場所が現在の革命公園であり、本稿の考察対象である。

劉鎮華指揮下の鎮嵩軍と西安守備軍による戦闘の結果、国民聯軍の到着による戦局の打開まで約 8 ヶ月に渡って西安は孤立し、民間人を中心に多くの人々が餓死や凍死する惨劇となった。鎮嵩軍による包囲が解かれた後、この事件による、人々の大量死をどのように扱うかが、緊急の課題として浮上した。ここでは、問題化の過程を『新秦日報』に掲載された記事から、たどってみたい。

---

[1] 以下の記憶、「歴史記憶」については、記憶のパフォーマティヴィティの議論を参考とした(西村:2010)。

[2] 田克恭「在西安被圍城的日子里」には、当時口にした「食料」や密かに包囲網を脱出する試みなどが克明に記されており、貴重な資料となっている(田:1987)。

[3] 園内の事件説明プレートによる。なお、当時の西安の人口を約 10 万人とする資料も多いことから、この 20 万人という見解には周辺避難してきた流入人口を含んでいると思われる。

1927 年 1 月 7 日の記事には、長安県の住人である劉家駿から総副司令、長安県役所に対して、大量に遺棄された遺体の処理についての建議が届けられた。劉家駿の主張は明確であって、城の包囲が解かれてすでにひと月あまりになるのに、廟や空き地に大量の遺体が放置され、鳥や犬に啄まれて、臭気を放っている。付近の農民も、命令がなければ敢えてこれらを埋葬しないが、この状態は「人道」に合わないばかりか、衛生のうえでも問題があるので、その場で埋葬をしてほしい、というものであった。

この建議に答える形で、国民聯軍駐陝総司令部は、戦死者と死亡した人々が多いことから、追悼大会を開催して「忠魂を安んじ、幽怨を慰める」ことを決定する。1 月 13 日に、第 1 回の委員会が開催され、各旅団、機関から 2 ～ 3 人の代表を選出し、この会議に参加させた。ここでは、陝西省政府主席であり、国民聯軍駐陝総司令部の副司令である于右任から大会の意義が述べられ、西安城北側の皇城跡で公祭を開催し、劉鎮華が陝西省にもたらした災禍を記念し、2 月 16 日に「陝西追悼暨公祭国民全軍陣亡将士与死難人民大会」を挙行することが決定された。

翌日に開かれた第二回会議では追悼大会の名称が「西安革命大祭」へと変更され、その後あわせて 7 回の準備会議が開かれている[4]。

この、「西安革命大祭」に際して形成されたモニュメントは、革命亭に代表される建築群と、城内外に散乱した遺体を埋葬した合葬墓、それに付随する記念碑であり、これらが永らく革命公園の主要な建築物となっていた(写真 1)。

2 層[5]の壮麗な建築物である革命亭は、西大街にあった清代の建築物「明遠楼」から得た材料で作られたとも、清代の軍人で回民蜂起鎮圧の過程で落命したトルンア(多隆阿)を祀った「多忠勇公祠」を解体して建設したとも伝えられている。1924 年に西安を見学した王桐齢によれば、民国成立以降はこの「多忠勇公祠」で、反清闘争での落命者や「匪賊」討伐での戦没軍人を祀っていたという(王:1928)。いずれにせよ、これらの広く知られた伝承が正しければ、この建築物は専用に準備された材料ではなく、中華民国が第一次革命によって打倒した対象および戦没者祭祀施設の再構成によって完成したといえる。建築物が全く新しい創造ではなく、既存の材料のパッチワークであることは、記念大会での顕彰の詞と並行関係にある。この公園を象徴する革命亭には、楊虎城の手による「生者千古　死者千古　功満三秦　怨満三秦」という對聯が掛けられた。

その後方に設けられた烈士祠の内部には、のちに、辛亥革命から国民革命まで、すなわち 1911 年から 1927 年の戦没者や関連のある人々の位牌と、遺物とが集められ、展示、祭

---

[4] それぞれ「劉家駿対於掩埋露尸之建議」(『新秦日報』1927 年 1 月 7 日)、「国民聯軍駐陝総司令部籌備追悼死亡将士及死難人民」(同 1 月 14 日)、「追悼陣亡将士死難人民籌備会第二次開会情形」(同 1 月 15 日)、「陝西革命大祭召開第三次籌備会情形」(同 1 月 16 日)、「革命大祭第四次籌備会議」(同 1 月 20 日)、「革命大祭第五次籌備会紀略」(同 1 月 22 日)、「革命大祭第六次籌備会志略」(同 1 月 24 日)、「革命大祭第七次籌備会志略」(同 1 月 26 日)、「陝西革命大祭籌備処之通知」(同 1 月 27 日)による。

[5] のちの 3 層へと改築され、現在に至る。

祀されることとなる[6]。

もう一つのモニュメントである合葬墓「陝西革命殉難軍民合同冢」は、革命亭を正面にみて左右にそれぞれ一つづつの「東大冢」、「西大冢」からなる墳墓である。この塚は、後述する形成過程から「負土墳」、あるいはその状況から「万人冢」と俗称されることもある。「陝西省革命大祭籌備委員会」でたびたび議長を務めた聶芝軒の述懐によれば、1927 年 2 月 7 日から 20 日までの間、埋葬部隊を組織し、南北 10 丈、幅 1 丈 4 尺、深さ 1 丈の溝を水戸の東西それぞれに 15 本づつ掘り、人の往来が少ない深夜を選んで足が道路側を向くよう城内の遺体 2743 体を埋葬した(聶:1963)。このほか、場外から持ち込まれた遺体を合わせて、ここには 3043 体が埋葬されることとなった[7]。

この大量死の処理においては、「陝西革命大祭」の開催通知にあるように、死亡した民間人と戦死した将兵をあえて峻別せず、革命の名の下に合葬して記念としたことが重要である。実際には、遺体の損傷が激しく、およそ、頭髪の長いものは女性とみなして西の「女冢」へ、頭髪の短いものは東側の「男冢」へと埋葬した、と伝えられる[8]。よって、この時点までに、陝西革命大祭第 3 回準備会議で決定されていた、戦没将士の姓名、籍貫、年齢、戦没日時と様子を記録し、戦没者と民間人を分けて祭祀する形式は、放棄されていたといえる。

こうして、急速に準備が整えられ、2 月 25 日に「陝西省革命大祭」を迎えることとなった。大会では、現在の革命公園前広場が会場とされ、参列者の席が設けられた。馮玉祥が主催した本追悼会では、西安の守備がもつ革命実行のうえでの意味が説かれ、そのために犠牲を厭わなかった(とされた)西安の住民と兵士たちの革命精神が称揚されている。翌日には、西安の北、渭河近くまで多くの人々が籠や鍬を持参して集まり、土を城内へと運搬し、万人冢のうえへ盛り土をしていった。よって、この二つの塚には「負土墳」の別名がある。この活動には、馮玉祥も自ら土を担いで城内まで運んだとされるが、多くの西安および近隣の住民が自発的に参加した、と広く伝えられていることが注目される。前述の聶によれば、周辺の農民たちも「もしこれらの人が自分たちの代わりに死ななければ、劉鎮華に苦しめられて殺され城内にいっていただろう。あなたたちが盛り土をするなら、我らも追いかけて盛り土をせねばならない」としてこの活動に加わった、という(聶:1963)。

塚の前には、「西安革命公園国殤墓碑」、「西安革命大祭紀念碑」、「陝西革命殉難軍民合冢銘」、「殉難人民紀念碑」、「陣亡将士紀念碑」が建立され、その後、「烈士祠」や一対の獅子像など、中央の通路沿いには多くの墓碑が追加されて、革命と死の空間が形成されていっ

---

6 これらは、文化大革命時期に遺棄され、現存しない。

7 本稿では基本的に現在の中国側資料における数字を採用するが、この埋葬者についても他所を同じく具体的な数字はいくつかの見解があり、本文は革命公園側の資料によったが、今日一般的に流布する西安に関する百科事典『西安通典』などでは 3742 人説を採用している。

8 当時の青年、中年男性は短髪、老人は清代の名残で後頭部にのみ頭髪を残していたことによる(張:1987)。

た。

2－2　中華民国期における革命公園の位置づけをめぐって

ここで、西安籠城戦という事件をめぐって形成された革命公園の位相を、先述の黄花崗公園および西安市内の類似施設との比較から検討してみたい。

先述の広州黄花崗公園が蜂起の犠牲者七十二烈士を中心に構成され、その後発生した烈士を追加しつつ、蜂起や革命と無関係な人々の墓地を排除し、革命のモニュメントとして特化していったのに対して、陝西革命公園では埋葬された死者のほとんどが民間人であり、死因も餓死や病死が多かったことから「死難軍民」として祭祀されている。すなわち、主体的に革命に参加し殉じた、烈士と称される人々を顕彰する墓地としての黄花崗公園に比して、被埋葬者の大半が戦闘で死亡した人々ではなく、一般の都市居住者であることが大きく異なっている。この大量死を、人々の記憶から歴史記憶へと転換する試みは、「人道」と「衛生」を理由に建議された遺体の埋葬が、追悼会の組織、記念のための公園建設へと展開する過程に顕著に見てとることができる。

転換の初期的な試みは、この西安籠城戦を、国民党による北伐の過程という大きな物語に回収させて、その死に意味を見出すことに認められる。換言すれば、西安近隣の人々が自発的に土盛りの労働に参加した動機に言及した聶による証言、すなわち、死亡したのが「私だったかもしれない」、あるいは、「私の代わりに」といった観念上の死の共有がもたらすある種の連帯があったが、この範囲を拡大し、それを取り込む物語のなかに定位する作業ということもできる。

その物語とは、具体的には、軍閥系の劉嵩軍を西安に引き付けることで、敵の兵力を分散し、南方での北伐を有利に進め、北方の馮玉祥軍閥を国民党に引き入れる作用をもたらし、「反帝反軍閥」を掲げる北伐の成功へと道を開いた、とするものである。この見取り図を描くことで、籠城戦に巻き込まれた被害者の意図を超えて、革命のための殉難としての意味を付与しようとした。すでにみたように、追悼会の名称が単なる戦死者と民間人の死者の追悼である「国民全軍陣亡将士与死難人民大会」から「革命大祭」へと変更され、とくに民間人については「死難」から「殉難」へと書き換えられることは、こうした一連の歴史認識形成の過程を反映している。馮玉祥の撰による「西安革命公園國殤墓碑」の内容は、主に西安を守備した部隊の顕彰であるが、彼ら兵士を「革命の意図を深く理解し、国家のため人民のために犠牲となった」とし、追悼大会で「陝西革命殉難軍民合冢銘」を記した、国民軍の司令であった劉郁芬は、その銘のなかでこの度の犠牲者を黄花崗の烈士になぞらえて革命への従事として称揚している[9]。その一方で、馮玉祥は、「西安革命公園國殤墓碑」のなかで、おそらくは塚に合葬した遺体のなかには敵兵士のそれも含まれていた可能性に触れているが、この墓碑以降、劉嵩軍兵士の遺体合葬の可能性への言及が消えてゆ

9 「西安革命公園國殤墓碑」および「陝西革命殉難軍民合冢銘」の文章は、『西北革命史征稿』によった(陝西革命先烈褒恤委員会:1990［1949］)。

き、西安に籠る軍民一体となった犠牲による革命への貢献という言説へ収斂してゆくこととなる。ここに、友軍も一般民間人もそして敵兵すらも対象とするような、すべての受難者の慰霊碑となる可能性はその芽を摘まれた。

于右任もまた、政府要人として碑を建てているが、この碑は、省主席を務めた立場と、国民聯軍の司令を務めた立場を反映しており、本稿の関心から重要である。この碑は、一つは「圍城之后　西安負土墳　殉難人民」にむけたもの、もう一つは「西安負土墳　陣亡将士碑哀詞」となっており、前者は「長安の民は革命のために長安の都市を守り、革命のために自身の犠牲をもって解放を求めた」で始まる。ここにもまた、一般の都市住民が巻き込まれた戦乱と大量死をどのように物語に位置付け、「歴史記憶」化してゆくかが明確に現れている。

この、国民党の北伐への貢献という「歴史記憶」は、追悼大会以降もたびたび姿を現すことになる。陝西省で絶大な人気を誇り、のちに共産党政権下でも「愛国将軍」と評価が確定している楊虎城による、先述の「革命亭」對聯の語句ですら後に変更されていることは、この典型的な事例となろう。最後の語句である「怨満三秦」は、兵士、民間人を問わず、大量の死者を出した籠城戦の指導者としての率直な感想であろうが、これは、のちに楊虎城の謙遜であるとして、「怨満三秦」から、革命のために名誉ある犠牲を遂げた栄光として「誉満三秦」へと書き換えられて今日に至っている。

同上の変化は追悼対象の変化にもあらわれている[10]。この公園を使った数々の記念式典のうち、大規模なものとしては、1936 年の籠城からの解放 10 周年記念大会と、学生による華北抗日兵士への募金活動、1938 年 4 月の黄花崗烈士の追祭と、同じ年におこなわれた劉桂五の追悼大会が知られている。黄花崗公園の烈士についてはすでに述べたので、劉桂五について述べれば、彼は西安事変の際に「兵諫」を実行し、蒋介石を捕えたことから、西安にも関係した「烈士」といえよう。しかし、ここで劉桂五の追悼会を開催したことは、この地域に関するローカル性をもった人物の顕彰としての側面ではなく、すでに進んでいた国家の物語としての側面からその後の革命公園の展開に寄与してゆくこととなった。1943 年には、公園内に設けられた旧来の「烈士祠」が「忠烈祠」へと改名され、「烈」たる方向性が明確にされた。同時に、祭祀対象が、劉桂五と同じく日中戦争により湖北省で戦死した張自忠ら国家級の烈士 38 人と、各地の戦没者となっている(宗ほか：2012)。この段階で、戦没した無名兵士と殉難民衆を記念する公園に、特定個人の顕彰が導入され、また、日中戦争という国難に直面するなかで、西安、あるいは、陝西省を超えたナショナルな歴史上の人物を中国の一地方で記念する空間へと変質しつつあった。ただし、この段階に至っても、先述の于右任は、「無名英雄紀念碑」を送っており、国家的な物語を普及させつつも、個人を対象とする顕彰のあり方とは異なる顕彰を実践している。

このように、公園の位置づけは中華民国の与えた意味での「革命」に当てはめられていったが、他方で民間の想像力のなかでは、合葬塚の俗称が「万人冢」であったことからも

[10] 以下、中華民国期の各種記念大会の記事は、『新秦日報』『西京日報』によった。

理解できるように、死の非正当性を喚起させる要素を多分に含んだ場所となっていた。結果、黄花崗公園の事例のような革命に関する聖地としての墓苑として完成されることもなく、1930 年代には広大な敷地の一部ですでに荒廃が進み、ある訪問者は「園中に管理の者なく、草が生い茂る」といった感想を残す程度に、無縁墓としての義地に近しい状況を呈することとなった(何:1932[1971])。陝西省建設庁西安園林管理処の管轄であった 1940 年代には、ほかの公園に先駆けて、噴水の設置、井戸と水道の充実、植樹など、繰り返し公園の修復が提案されている様子が残された行政文書から確認できるが、十分な処置が施されぬままに、1949 年を迎えることとなった。また、この時期、公園南方に、森林公園と公共体育館が建設され、所管は革命公園に残されたが、革命事績に関する面積は縮小した。

中華民国期の野外での政治儀式は、おもにこの革命公園と、ほぼ連続する紅城(かつての皇城、現在の新城)、明の貴族所有の庭園の放生池周辺を 1916 年に改修し「蓮華池」として開放され、1927 年には「蓮湖公園」として整備した場所でおこなわれていた[11]。その理由として、当時の西安市内には、新たに導入された「公園」という概念を体現した空間が少なく、ある程度の大きさを備えたものは、本稿で着目する革命公園とこの蓮湖公園しかなかった[12]。さらに、蓮湖公園では、以前から于右任が度々講演していたこともあり、場所の広さとアクセスの良さからパレードの出発点や、祝賀、追悼式典会場として頻繁に利用されている。早い時期には、1923 年の日本による「二十一か条の要求」への反対大会、1925 年の孫文死去に際しての追悼記念大会が開催され、その後も、空にそびえたつような「抗日陣亡将士紀念塔」(1940 年 12 月落成)や、西湖の岳廟にある「国賊」とされた秦檜とその夫人を模した汪精衛と夫人の跪像(同上)が配置されている。こうして、「蓮湖公園」は革命公園とならんで、中華民国政府によるページェントを演出する空間として編成されていっ

---

[11] 革命公園、蓮湖公園整備以前には、講堂、広場、練兵場などのうち、故人とゆかりがあると判断された場所が選択されている。たとえば、1914 年に西安で死去した軍人の朱子橋は、災害児童教養院を経て大興善寺で追悼されたが、これは彼が生前尽力した社会慈善事業と仏教保護との関係によるものだった。1920 年代に紅城でおこなわれた式典としては、「レーニン逝世 3 周年紀念」、知識青年や労働者による「5 万人大会」、「メーデー大会」「五五マルクス誕生記念会」など(いずれも 1927 年)がある。革命公園では、「紀念西安圍城 7 周年大会」(1933 年)、「九一八 5 周年紀念大会」(1936 年)が開催され、20 年代後半の紅城と革命公園の重複期間について、紅城と革命公園の使い分けは明確にできなかったが、おそらくは、国際的な記念と、中華民国の式典の差があると思われる。ただし、この時期、同盟会系で靖国軍司令を務めた胡笠僧(胡景翼)のように、戦没ではなく、病没であることから革命公園ではなく、西北大操場が使用される例(1928 年「笠僧三周年紀念大会」)もある。

[12] 1930 年代になると、唐大明宮丹鳳門の位置に「丹鳳公園」が整備されるが、小規模でかつ不便であることから、1950 年代に単位の住宅へと姿を変え消滅している(新城区志編纂委員会(編):2000)。また、革命公園と同じく、国民党の事績に関連して命名された「建国公園」（1930 年一般開放）は、その名称が問題となり、1961 年に「児童公園」と改名され、遊具を配置した総合公園へと転換された。

た[13]。蓮湖公園にも、1930 年代に客死した欧米人を埋葬するなど、墓地化する契機はあったが、革命公園のように墓地を基盤とする空間となることはなかった。蒋介石時期の国民党的色彩が濃くなった結果、1949 年の政権の交代後には、蓮湖公園は、かつて式典を演出した「抗日陣亡将士紀念塔」「国賊」汪精衛、夫人跪像など各種の記念物が取り払われ、中華民国時期に書き込まれた意味を喪失し、その他の国民党関連の記念史跡と同様、急激にその地位を失った。それらにかわって、現在この公園には「地下党員連絡所」や共産党員の両親のもと監獄で育てられた国内で最年少の烈士として知られる「小蘿卜頭」(宋振中)の顕彰像が建てられている(写真２)[14]。

３．革命公園の変化―「革命」を離れて―

3－1　動物園としての革命公園

中華民国当時の西安にとって重大事件にもかかわらず、その複雑な背景から、位置づけの難しい事件の記念公園となった「革命公園」は、その後どのような展開を経たのであろうか。

1949 年以降、もっともはやい時期の革命公園に関する記録のひとつは、革命公園の分割に関する事項である。すでに革命を記念する空間とは別の景観を生み出していた公園南側部位の公共体育館が完全に切り離され、「西安市人民体育場」として整備が進められた。この動向と並行して、矛盾するようだが、烈士記念という意味を維持する方向への萌芽もみられた。それが、1952 年の王泰吉、王泰誠兄弟の「紀念塔」の建立である(写真３)。王泰吉は、西安に隣接する臨潼県(現在の臨潼区)に生まれ、広州の黄埔陸軍軍官学校で軍事を学び、馮玉祥が蒋介石と接近した時期に共産党軍殲滅の命を受けたが反旗を翻し、「渭華起義」(1928 年)や「輝県起義」(1933 年)を起こし、「工農革命軍」や「西北抗日民衆義勇軍」 を率いた軍人であり、1934 年に刑死している。王泰誠も、兄と同じく紅軍に属し、地域の民団との戦闘のなかで落命している。刑死と戦死との差異はあれ、従来の死生観では「非正常死」の範疇に属する二人が、紅軍に属したことから焦点化され、中国共産党は西安を「解放」してさほど時間をおかず、党と人民政府の名の下に、両「烈士」の父親や労働者を招聘して、当該地域の慣習ではとくに祭祀の習慣のない死後 18 年目に「殉難十八周年公祭」を挙行することでかれらを顕彰したことは興味深い。この場所に記念塔を建立した理由として、二人が西安近郊の出身であることとならんで、1949 年 6 月に国民党の支配を脱した西安がここで「慶祝西安解放暨歓迎解放軍大会」を挙行した実績があることから妥当であ

---

[13] この公園の茶社は、共産党の地下連絡所となっており、現在では共産党の革命史跡として記念碑が整備されている。

[14] 宋振中自身はこの公園や西安と深いかかわりがあるわけではない。西安とのかかわりを求めるとすれば、彼は、父親が楊虎城に仕え、ともに 1949 年に重慶で殺害されたため、翌年共産党政権による楊虎城の顕彰が本格化するなかで、その他の遺体とともに西安市長安区の「楊虎城将軍烈士陵園」に改葬されることとなった程度にとどまる。

これらの記念物は、後述する新たな「歴史記憶」形成時期に建立されている。

ると判断された、と思われる。その一方で、兵も住民もあわせて合葬した、「無名の人々」の墳墓を基礎とする従来の革命公園の性質からは、特定の人物に焦点をあてた顕彰である点において逸脱している点に注意を払う必要がある。むしろ、特定個人を称揚し、顕彰する傾向性が強い辺区政府時代からの共産党政権の特徴が革命公園に持ち込まれた、と捉えることも可能であろう(田村：2014)。

ただ、これ以降、革命公園は、むしろ「革命」と切り離された形での発展をとげてゆく。そのことを示すために、以下では、多少雑駁になるが、1952 年以降に展開された、革命公園の出来事を、事務室メモ、档案、そして人々の記憶から年代をおって概観したい。

1953 年夏になると、園内に噴水をあしらった池や温室、簡単な遊具が設置された。公園の整備にともなって、政府は、ルーマニアの民謡歌舞団を招聘し、非常に多くの観客を集め、市民の話題となった。

1956 年には、公私合営式の「流動馬劇団」(巡回公演サーカス団)が組織された。ここで現れるサーカスは、希少な動物の飼育があって成り立つが、これは、1956 年に上海からやってきた移動動物園「同法動物園」が西安滞在時に社会主義化を進める「三大改造」のために定着し、公園の広大な空き地を利用して、1956 年からその西隅に小規模な動物園「西安動物園」を開設したことと関係している。1950 年代の革命公園の入場料は一人 2 分銭、動物園にはさらに一人 5 分銭のチケットが必要だったが、当時珍しかった禽獣を見学するために、動物園の開設当初は、多くの市民が押し寄せ、そのために自転車置き場や列に並ぶ人々への娯楽提供のために門の外に新聞掲示板が併設されるほどであった。その後、飼育展示される動物の種類は増加し、のべ 200 種余りの鳥類、爬虫類、魚類、哺乳類が動物園をにぎわせた。とくに、ライオン、オオカミ、トラは人気が高く、計画経済時代には餌の確保が困難だったにもかかわらず、飼育が続けられている。

1963 年には、公園内に青いテントを設置し、クジラの骨格展示が開催され、5 分銭のチケットにも関わらず、多くの見学客を集めた。

こうした様々なイベントの企画にもかかわらず、植物園、動物園としての公園は、すでに多くの市民を恒常的に集める場とはならず、収支が悪化したことから、1965 年になると、公園職員による「流動外展隊」が組織される。この「外展隊」は、嵐皋県(陝西省安康市)や石泉県(同前)、平利県(同前)、西郷県(陝西省漢中市)といった省内南部の遠隔地へ出かけて、当該地域の空き地を利用して講演で飼育している動物を展示して収入を得る活動に従事した。この活動が実行されるに至ったもっとも大きな動機は、来園者の減少と、それに伴う経済状況の悪化とであるが、その発想の基には、前述の「流動馬劇団」の成功の経験があった。この段階で、悪化した経済状況を回復させるための資源として使用されたのが、西安の「革命」に関する記念物ではなく、飼育している動物であった(同じ文脈で資源と言い得る植物は移動展示が困難である)ことは注目してよい。

この時期には、すでに、一部の人々、のちに河南省など外部から西安に移住した人々の間では、合葬墓地であった公園の前身は忘却され、動物園、植物園としての革命公園とな

った、とされる。

文化大革命時期には、各地の単位と同じく、極端な左派路線に晒されたが、とくに国民党時代の遺物に「革命」の二字がふさわしくないと判断され、「東風公園」(主管単位も 1967 年から「西安東風公社」に改名、公園は 1972 年に従来の名称に戻された)と改名する。この時期には、新城区総合弁の管理にあったが、園内の記念碑の多くが、右派的であるとされ、紅衛兵らによって破壊された。

熱狂がある程度沈静化すると、公園は、1974 年になって西安市園林処の管理へと移行され、多くの公園と同一の管理が実施されるにいたった。管理機構が回復すると、手狭になった動物園の移動が検討されはじめた。同年に友好都市の締結をした日本の京都市、奈良市から多数の動物の寄贈を受け、飼育対象が増加したこともこの問題に拍車をかけていた。1977 年 5 月 1 日に、公園の新たな象徴となっていた動物園は、同じ西安市ではあるが当時は郊外であった、現在の東第二環状道路と、互助路の交差点際へ移動させられる。移設は、91 種 431 匹の動物を移動する大事業であったが、混乱する経済状況のなか、市内の国営企業や関連部門のリーダーの支援のもとで開園にこぎつけた。この新たな場所は、1956 年の都市計画のなかで形成された「韓森路苗圃」と呼ばれる植樹試験場であり、革命公園と同じく園林処の管轄であった。なお、この動物園も、近年の西安市域の拡大に従って移動を余儀なくされ、2005 年に西安南郊外に開園した「秦嶺野生動物園」と合併することでその動物展示、飼育機能を停止し、植物観賞を中心とした「長楽公園」として再修築されている。

3－2　文化施設、休息、散策場としての総合公園―共産党的烈士陵園との関係から―

象徴を失った革命公園は、新たな利用用途を模索することとなる。改革開放とともに、正月行事の一つである「灯会」(旧暦 1 月 15 日の元宵節におこなわれる飾り灯篭の展示会、ランタンフェスティバル)を開催することが決定され、1979 年から 2004 年まで断続的に西安を代表する「灯会」会場として使用され、市民の歓迎を受けた。また、菊花や香り高い花を集めた展覧会を繰り返し開催し、市民に親しまれる公園へと転換されていった。これらの園芸展覧会は、中華人民共和国時期以降に園内に設けられていた翠湖蓮池や、築山、写真館、露天映画施設、新城区閲覧室、将棋囲碁室、茶社や食堂といった常設施設とならんで、公園の名物となってゆく。さらに、改革開放後には、子供連れの訪問者のために観覧車やメリーゴーアラウンド、電動飛行機などを備えた遊園地を併設して、青少年科学知識展示会、古文化芸術展、民俗文化展、書画展、恐竜模型展示会などの各種イベントが行われる会場として、総合公園化を果たすことになる(写真４)。その結果、この公園が市民に惹起する記憶は、「革命」や「烈士」といった聖なる空間ではなく、週末に訪れた動物園や遊園地、あるいは結婚記念写真や人生の節目に当時貴重であった「全家福」(一家の集合写真)を撮影した写真館となっていた[15]。

---

[15] 当時の西安市新城区には 5 つ程度の国営写真館があったといわれるが、この革命公園写真館(のちに「海燕写真館」へ改称)での記念写真は、現在でもしばしば、1960 年代から 70

このように、1953 年以降の革命公園は、中華民国期に形成された方向性を前面に押し出すことをやめ、共産政権の下で新たに設置された公園群[16]と同じく、市民に健康的な余暇を過ごし、社会教育を施す場としての公園機能が拡充されている。この 50 年代に起った大きな転換の理由は、西安市南郊に新設された、「西安烈士陵園」の存在である。

「西安烈士陵園」（1958 年に「西安市南郊陵園」改名される）は、1952 年 3 月に西北軍政委員会の批准を経て建設が着工された、集合型墓地兼記念園である。ここには 1928 年に刑死した共産党地下員らからなる、いわゆる「西安九烈士」や、中華民国期には先述のようにかつて革命公園で追悼大会が行われた劉桂五、朝鮮戦争に出兵した義勇軍の「八烈士」のひとりである侯天佑から、現代の公務中に殉職した消防員や警官ら、党幹部及び「愛国人士」とされる人々が改葬され、記念される神聖な空間が形成されている(写真５)。同時期に形成された西安近郊の戦没者陵園である「扶眉戦役烈士陵園」が、1949 年 5 月の共産党と国民党による戦場に設けられた古戦場型陵園であるのに対し、この西安烈士陵園は、交通の利便性を考慮して設けられた陵園であって、現在にいたるまで「人民群衆、とくに多くの青年に対して、革命英雄主義と革命伝統の教育をおこなう教室」として使用されている[17]。革命公園では、王泰吉、泰誠兄弟の顕彰行事を最後に革命に関するイベントが廃止される一方で、新たに形成された陵園が正統な共産党の烈士記念空間として機能していったのである。

４．新たな「歴史記憶」の付与：曖昧化する「革命」という言葉

総合公園としての革命公園と、革命記念施設としての西安烈士陵園とのすみわけにより、この公園は「歴史記憶」から切り離されたかに思われたが、近年の諸活動からは、新たな動向を見出すことができる。そこで本章では、動物園移転後の公園にとって重要な意味をもつ変化をそれぞれとりあげてみたい。

まず、1983 年 12 月に、西安市人民政府の第 1 期「重点文物保護単位」として、革命亭が指定された。これは、歴史的に有意味であるとみなされつつも文化大革命時期に荒廃が進んだ建築物を文化財として認知するにとどまり、既に転換した公園全体の意味づけを大きく変えるものではなかった。

むしろ再び大きな転換の契機となるのは、1993 年の「民族英雄」銅像の建立である。この年は楊虎城の生誕 100 周年にあたり、これを記念して、かつて西安籠城戦を指揮したこの軍人を顕彰することが、陝西省委、省政府、省政協による検討を経て決められた。像は青銅で鋳造された高さ 3.5 メートル、台座部分を含めて 5.9 メートルの巨大な立像であり、

年代の懐かしい記憶として回顧されている(『華商報』2014 年 9 月 9 日 A11 など)。

[16] 1949 年以降、新たな都市計画に従って、市内には各区に新たな公園が新設されていった。社会主義政権時代の代表的な公園としては、唐の遺跡を苗圃へ、そして公園に改修した「興慶宮公園」(1958 年開放)、「労働公園」(西郊団結路に位置する 1964 年造営着工の公園。労働者、学生、部隊、幹部の義務労働によって形成されたためこの名がある)などがある。

[17] この説明は、『西安百科全書』による(西安百科全書編委会(編):1993)。

陝西省委文史資料研究委員会が中央美術学院芸術創作研究所に設計を依頼し、大連青金属有限公司によって作製されたが、軍人らしさを強調するため帯刀し前方を睥睨するデザインが採用されている(写真６)。台座の側面には「民族英雄　千古功臣」の文字が刻まれ、除幕式には、200 余名が参加し、大きな話題を呼んだ。像の設置に伴い、外構と芝生の広場が設けられ、特定個人単位の顕彰としては王泰吉、王泰誠兄弟以来 2 例目、人物像としては初めての顕彰を受けることとなった[18]。楊虎城は 1949 年の落命後、はやくから共産党による顕彰が進んだために、遺体は建国初期に重慶から運ばれ、西安近郊に設けられた「楊虎城将軍烈士陵園」に改葬されているため、この公園の立像は、あくまで英雄を記念するためのモニュメントと説明されている。

1980 年代には、郊外に大規模な遊園地公園「北方楽園」(1986 年開業)などの施設が誕生し、園内の遊具自体目新しさを失うことで、城内の簡易な文化、娯楽、休憩施設として機能していた公園にとって、この革命史跡としての位置づけは、新たな方向性を提示するものであった。1995 年 10 月 6 日に西安市精神文明建設指導委員会から「西安市第二回愛国教育基地」に指定されつつも、革命亭や、旧忠烈祠などのほかには当時の建築物は存在せず、著名な人物の碑文や位牌なども文化大革命時期に失っていた公園にとって、この、地域の「民族英雄」を記念し、彼らを焦点とした歴史を前景化させる方向への傾倒は、公園の個性化のために必要なことと思われた。2000 年代に入ると、ここで確認された方向へむけての再整備が急激に進むようになる。そのなかで、新たな「歴史記憶」が形成されてゆくこととなった。

2002 年には、南門(実質的には正門)に、馮玉祥の筆跡から転写した「革命公園」の文字を掲げ、入場料を廃止し、より多くの市民を呼び込むこととした(写真７)。回民蜂起を鎮圧した左宗棠とならぶローカルなヒーローである馮玉祥の手跡を公園の正面に掲げることは、西安市民と行政の事件に関する認識の合致といえる[19]。翌年の 2003 年秋には、革命亭、忠烈祠、そして二つの合葬墓が陝西省人民政府による第 4 期「重点文物保護単位」の指定を受け、その価値を確認された。指定を受けた当時の合葬墓は、どちらも、多くの公園利用者によって踏み固められ、頂上付近は平坦になっており、人があまり立ち入らない後方部分には雑草が生い茂っていた。文化財として認知されることで、ふさわしい形への修景が検討され、翌年には公園利用者の土饅頭への登頂禁止が定められ、一方で、直径約 18 メートル、高さ約 2 メートル余りの円墳状の塚へと作り変えられた。さらに、その後、合葬墓の前には、書籍を広げたデザインの石碑(これは、あたかも歴史絵巻を広げるように西安の過去を学ぶことを意図している)が設けられ、塚の由来が刻み込まれて、今日の景観が完成した(写真８)。

---

[18] この像を囲む広場は、後述する 2000 年代の「歴史記憶」の再編成により注目を受け、2005 年に再度 14 万元を投資して 300 平方メートル拡張している。

[19] ただし、西安城の門に現在に至るまで名を留める馮玉祥は、共産党の認める「民族英雄」の一人であるが、左宗棠については 1949 年以降、国家と回民蜂起地域の人々の評価が相反することから、近年の両者の扱いは、文字化された歴史評価では、対極に位置する。

歴史教育の場、革命のテーマパークを目指す動向は、こののちより一層先鋭化する。その理由としては、中国を代表する観光都市の一つである西安の観光開発への投資の増加、2004 年から活発化する中国共産党の建国までの苦難の道のりを訪問する「紅色遊旅」が牽引となった[20]。2005 年には、中共中央弁公室の批准を経て、劉志丹の彫像が完成した(写真９)。人物像部分は漢白玉(輝きのある白色大理石)で作られた 5.2 メートルの巨大な像であり、台座部分を合わせると 7.2 メートルに達する。台座南側には、毛沢東による追悼の言葉「群衆領袖　民族英雄　紀念劉志丹同志　一九四三」が転記され、北側には周恩来の「上下五千年　英雄万万千　人民的英雄要数劉志丹　一九四三」(いずれも、1943 年に中共中央により大規模な陵園が建設され、遺体が改葬される際に開かれた「公祭劉志丹烈士大会」の際の言葉)が刻まれている。この像は、11 月 19 日に除幕式が開催され、式典には陝西省省委書記李建国や、省長陳徳銘、西安市市委書記袁純清、市長孫清雲ら地方政府要人(いずれも当時の職位)と、元陝西省人大常委会副主任である劉志丹の娘や親族が参加した。劉志丹は陝西省の人物であり、1949 年以前の「民族英雄」ではあるが、さきに銅像が建立された楊虎城とは決定的に異なる点がある。それは、彼が西安籠城戦に関係しないことである。つまり、公園建立の契機である西安籠城戦という基準はすでに採用されなくなり、陝西省(西安ではない)という地域を代表する「民族英雄」モニュメントの集合へとズレが生じ始めたのだった。

2007 年 3 月には、忠烈祠の前で「革命公園建立八十周年紀念儀式」が挙行され、西安市人民政府副市長李秋実、西安市人大常委副主任盧猛虎、西安市政協副主席向徳ら(いずれも当時の職位)がこれに参加した。ここに、久しく挙行されなかった、革命公園の記念行事が復活した。この行事にあわせて、文化大革命中に損壊した碑文の収集事業、上級の指示で忠烈祠建物内部の修復を経て、「革命公園革命歴史図片展」(革命公園と西安市委党史研究室の共同開催)が催された。この場には、専門の解説員が待機し、展示された写真、碑文拓本、文字資料パネルを示しつつ、今日的な「歴史記憶」をさながら絵解きのように説明した(写真 10)。すでにみたように、忠烈祠の改名時点では、それは国民党に対する「忠」の強調であったはずだが、この建築物は現在、単なる文化財としてではなく、青少年愛国主義教育基地、そして、党史教育基地として活用されている[21]。

さらに、翌 2008 年には、園内で 3 体目となる英雄像が建立された。それは、双眼鏡を片手にした戦場で指揮をとる姿をモチーフとした謝子長の銅像で、人物像は 4.2 メートル、台座を含めて 7.2 メートルの、巨大な立像である(写真 11)。像の台座の東側には、毛沢東の自

---

[20] 革命公園自体はいわゆる観光地ではなく旅行客も少ないが、市観光局の様々な施策により、西安市全体の観光開発が活発となった時期と重なる(田村:2011)。革命聖地延安とならんで陝西省を代表する革命史跡のひとつ「八路軍西安弁公室旧跡」がすぐそばにあることから、この公園とまとめて西安観光の「革命追体験ゾーン」に組み込む開発計画が提出されている。

[21]「忠烈祠展室」は、2009 年 9 月に、中共西安市新城区委紀委の「反腐倡廉愛国主義教育基地」にも指定された。

筆から複製した「謝子長同志　民族英雄　雖死猶生　毛沢東題　中華民国二十八年七月初九」の文字が、西側には「一生為人民創造紅地　百姓到如今叫你青天　中共中央西北局」の文字が刻まれている。前者は、没後 4 年の 1939 年に中国共産党陝甘寧辺区党委と政府によって遺体が改葬されてかれの故郷に烈士墓地が作られた際に送られた碑文『謝子長烈士事略』からの引用であり、後者は没後 10 年を記念して 1945 年 2 月に壮麗な陵園が建造され、大規模な公祭が催された際に送られた挽聯の言葉が選択されている[22]。11 月 16 日におこなわれた除幕式には、陝西省省委書記趙楽際、省長袁純清、市長陳宝根ら地方政府要人(いずれも当時の職位)と、謝子長の息子である謝紹明(元国家科委副主任)、親族が参加している。

この謝子長の立像設置のために、かつて市民に親しまれた新城区閲覧室や写真館、レストランが取り壊されている。

いうまでもなく、2000 年代に設置された人物像である、劉志丹、謝子長は、中華民国時期の革命公園では追悼されない範疇の人物である。

謝子長立像について興味深い点は、建立の主体にある。楊虎城や劉志丹の立像が政府内の提案から建立にいたったのに対し、謝子長立像の場合は、中共中央弁公室の批准を経ているものの、謝子長の遺族らと、北京の「老革命」とが 2007 年のほぼ同じ時期に、提案書を提出したことが契機となっている。すなわち、同じ共産党の陝甘寧辺区政府時期の「民族英雄」であり、また、同様に県名に名を留めることでその死が顕彰された二人の烈士のうち、劉志丹のみここに記念像が新設されることへの異議と、バランスへの配慮が建立の動機となっている、といえる。このバランス感覚は、デザインこそ異なるものの、台座を含めた大きさがほぼ同一にそろえられていることからも追認できる。公園管理側からみれば、3 体の英雄像は、いずれも上級機関の指示によって場所を確保し、建立した、いわば受動的な対応だが、謝子長の像は、必ずしも政府内部の発案ではない立像の可能性を切り拓くこととなった。

５．おわりに

前章では、2000 年代に入ってからの急速な革命史跡の整備を、3 体の「民族英雄」像に注目しながらとりあげた。最後に、公園形成期からの変遷を踏まえながら、現在の革命公園における「歴史記憶」と記憶の問題をまとめてみたい。整理の枠組みとして、イタリアの労働運動研究者である Portelli の提示した 3 つの分類を整理加筆した、桜井によるナラティヴのモードを参考に、政治や党、国民的歴史を背景とする制度モデル、地域社会や職場を背景とするグループ・モデル、個人や家庭を背景とするプライベート・モデルの三つのレベルから検討する[23](Portelli:1991、桜井:2010)。

まず、人物像建立に限ってみれば、2000 年代以降のそれは、西安籠城戦とはほぼ関係を

---

[22] 陝甘寧辺区政府時期の烈士顕彰、追悼会については、田村(2014)を参照されたい。
[23] 以下の考察は、あくまで分類とその経験領域、主体に着目したものであり、彼らのいう叙述の社会空間の含意とは差異がある。

有さない点を確認した。かれらの像が革命公園に設置されることは、この公園がすでに西安籠城戦について事件が発生した地域において記憶にとどめるという枠組みを超えて、国家からみた「革命」という言葉によって緩やかに結びつけられた諸記念の集合体となっていることを示している。この転換のもつ意味は非常に大きい。

第 2 章で述べたように、個性を維持する数多くの烈士が継続的に増加してゆくほかの陵園などとは異なり、革命公園の起源が「人道」と「衛生」に基づく兵士、民間人の合葬墓であったことから、公園形成の初期においては、追悼に際して、繰り返し無名の民間人の受難が表明されてきた。敵兵の慰霊にすら言及される、いわば、非正常死の慰霊装置となる可能性を秘めていた。民国期後期には国家への「忠烈」という既存の知識のなかに回収され、集合的な顕彰対象となっていった。政権が交代し、旧民主主義革命時代の「革命」記念物としてその意味付けが曖昧となり、とくに 1950 年代に西安烈士陵園が完成することで、烈士の純粋性についての峻別を洗練させたことから、動物園を代表とする総合公園へと移行してゆくこととなった。それが、近年、再び国家の歴史を語る場としての役割を期待されている。文化大革命運動という、歴史の複雑さを極度にそぎ落とし、「歴史記憶」を単純化させた運動のなかで破壊された碑文の再収集、建築物の修復と再利用はこの変化を反映している。しかし、これら記念物の見直しは、過去のある時期の「歴史記憶」へと立ち戻ることを意味しているわけではない。

籠城戦から 80 年近くの時間を経てこの事件についての個々人の記憶が忘却されることで、新たに編成される「歴史記憶」は、居並ぶ英雄たちによって直観的に理解されうる、わかりやすい新たなものである必要があった。焦点化された特定の人物への顕彰の集中と、彼らを英雄としての先鋭化させることで、合葬墓以来のその揺らぎを収束させた、ということもできる。その結果、「光栄犠牲」(散華する)と刻み込まれた画一的な墓石が列をなす陵園とは対照的な景観を生み出したが、同時に、少なくとも現時点では、国家からみれば無名の、戦闘に巻き込まれて死亡した一般の人々の扱いを置き去りにしている。

この、国家的で著名な英雄をもって代表とするような「歴史記憶」の編成と一見矛盾するが、地域の台頭もまた、今日の革命公園の景観を理解するために重要となる。これは、大文字で記されるような国家の歴史に対して各地の歴史が変更、抹消される時期から、むしろ国家の歴史と地域の歴史が相互補完的な関係を取り結び、ときには国家の提示する枠組みから外れつつも表象される時代へと変化を指している。「万人冢」建設のために人々が土を負った状況を描きこんだ、陝西省中部関中地域の近代をモチーフとした陳忠実『白鹿原』(人民文学出版社、1993 年)や、西安籠城戦を正面から取り扱った張偉(樟葉)による小説『晩春』(2009 年)に代表されるように、1990 年代から現在に到る様々な当該地域をめぐる記録、写真集が好評を博し、広く当該地域の人々に支持される現象は、単に出版技術の容易化によってのみ可能となったわけではない[24]。さらに、ここで意識される地域の概念が伸

[24] 一般の人々と関わりにないレベルにおいては、『西安文史資料』第 3 輯(1963 年)、第 11 輯(1987 年)など、旧民主主義革命の特集のなかで文字化される機会はあった。

縮可能性をもつ緩やかな範疇であることから、たとえば、劉志丹像に対抗するように建てられた謝子長の像が地域の英雄として子長県政府の援助によっていたとしても、陝西省という地域の英雄として革命公園に許容される論理を成立させている。

このように、近年急速に進んだ、陝西省という地域の革命史跡化は、国家による「歴史記憶」と、地方社会による「歴史記憶」の摺合せの結果と捉えることができる。

ただし、現在に到るまで編成の継続しているこの「歴史記憶」が、そのままの形で人々に受容されているわけではない。個人の経験を通じて形成される、革命公園についての記憶のレベルでは、むしろ動物園や写真館、遊園地のような遊具、週末の家族との思い出と結びつき、革命や「烈士」、「民族英雄」といった言葉の醸し出す神聖性とは極度に異なっている。この個人の記憶は、現在でもなお、この公園でみられる諸活動、たとえば、大音量の音楽を流す「広場舞」(早朝、夜間などにおこなわれる健康、娯楽のための集団での運動)、同じく「唱歌」活動、結婚相手を探すために個人のプロフィールを書いた紙を多数掲示している「相親処」、健康器具を使って身体を鍛える老人たち、結婚写真の撮影に訪れるカップル、昼寝や夕涼みに訪れるといったなかで再生産されている(写真 12)。この、1950 年代以降獲得した、個人の記憶に支えられた総合公園としての位置付けによって、現在、ここは、平日平均の入場者がおよそのべ 7,000 人、休日には 11,000 人という世俗的で喧騒に包まれた非正常死を遂げた人々の墓地を中心とする公園となっているのである[25]。

以上、陝西省西安市の革命公園をめぐる「歴史記憶」と現在の人々の記憶とをめぐる考察をおこなった。そこでは、王の指摘するように、政治権力の歴史観に影響を受け、「記念すべき人物」の選出をおこない、同時に記念碑の毀損、抹消という手段をつうじて、自らのイデオロギーを強調している。また、烈士の死が抽象化され、「主義のため」「人民のため」「国のため」といった徳目化されることも確認できた(王:2005)。

その一方で、記念碑のみでなく、それが配置された公園に着目し、完全に消滅させられなかった旧民主主義革命時代の対象を考察することで、政治権力からメッセージとして発せられる、あるべき行動や思想の範型として機能することが期待された、未来志向型の「歴史記憶」を提示する公園の機能の一方で、同一の公園においても個人レベルでは異なる記憶が存在する可能性を提示した。本稿の事例では、それは「革命」の範囲が極度に狭められるなかで誕生した動物園や植物園、遊園地、写真館といった家族との結びつきのなかでの記憶であった。もし、公園の前身である合葬墓地が強く残るのであれば、墓地の隣で、写真で紹介したような「ユーモア地下迷宮」(この遊具の解説には、ユーモアに満ちたこの地下迷宮で遊び「笑えば 10 年若返り、楽しめば老いることがない」という文章が添えられている)を楽しむことはないであろう。このことは、それが国家といったマクロなものであれ、地域社会といったミクロなものであれ、ある種のポリティクスの結実として形成され

[25] この人数は 2013 年のもの。ただし、このなかには、東門付近の住人が移動のために通り抜けをしているのみの事例も含まれているため、実際に公園での散歩や休息、活動を目的とした利用者はこの数値より少ないと考えられる。

るモニュメントから視野をより拡大することで、これらを相対化しうる記憶の可能性を示している、と考えられる。こうした記憶は、「歴史記憶」と断絶した存在ではないことは、参考写真にあるように、そしてモニュメント建立の教育的意図どおりに、西安市民であっても公園参観者の多くが目を通し、その「歴史記憶」に触れている。「歴史記憶」の編成、顕彰が再び活発化すると同時に、地域の主体性が増し、さらに多くの人々が文字にアクセスし、様々な記録を残すことが可能となった現在の中国社会において、これら多様なアクターがどのような関係を取り結ぶのかという問題については今後の検討課題としたい。

参考文献

王暁葵
2005　「20 世紀中国の記念碑文化－広州の革命記念碑を中心に」、若尾祐司、羽賀祥二(編)『記録と記憶の比較文化史』、名古屋大学出版会
王桐齢
1928　『陝西旅行記』、文化学社
何慶雲
1971(1933)　『陝西実業考察記』、文海出版社
桜井厚
2010　「ライフストーリーの時間と空間」『社会学評論』Vol.60,No.4、日本社会学会
新城区志編纂委員会(編)
2000　『新城区志』、三秦出版社
西安市檔案館(編)
2011　『西安革命歴史図文集』、三秦出版社
陝西省革命先烈褒恤委員会(編)
1990(1949)　『西北革命史征稿』、上海書店
宗鳴安ら
2012『老西安旧聞』、陝西旅遊出版社
田村和彦
2011　「近年の西安観光をめぐる動向―名所旧跡をめぐる観光から体感する観光への展望」『シルクロード』21 号、九州・シルクロード会
2014　「近現代中国における「正しい」葬儀の形成と揺らぎ」、愛知大学現代中国学会(編)『中国 21』Vol.41、東方書店
張剣影
1987　「革命公園与万人冢」、中国人民政治協商会議西安市委員会文史資料研究委員会(編)『西安文史資料』第 11 輯
田克恭
1987　「在西安被圍的日子里」、中国人民政治協商会議西安市委員会文史資料研究委員会(編)

『西安文史資料』第 11 輯
聶芝軒
1963　「為紀念堅守西安死難軍民創建革命公園経過」、中国人民政治協商会議陝西省委員会(編)『西安文史資料』第 3 輯
西村明
2010　「記憶のパフォーマティヴィティ―犠牲的死がひらく未来―」、池澤優、アンヌブッシィ(編)『非業の死の記憶:大量の死者をめぐる表象のポリティックス』、秋山書店
李琳
2014「展開一張張全家福　看幸福的年輪蕩漾」『華商報』2014 年 9 月 9 日 A11
Portelli,A
1991　The Death of Luigi Transtulli and Other Stories: Form and Meaning in Oral History,State University of New York.

このほか、行政文書については、陝西省檔案館、西安市檔案館所蔵のものを閲覧、利用した。

資料

写真１　革命公園建設時の建築物

公園の中心となる革命亭(左)と東大冢(右)

公園前の「光明楼」と牌楼(いずれも現存しない) (いずれも、西安市檔案館(編):2011 による)

写真２　蓮湖公園に新たに建てられたモニュメント

地下党員たちの連絡処跡

宋振中記念像

写真３　1950 年代初頭に建てられた王泰吉、王泰誠紀念塔

写真４　公園東南部に建てられた遊具類(写真は現在のもの)

写真５　<u>西安市南郊陵園</u>

正面外観

建築物配置

烈士記念レリーフと墓碑

写真６　楊虎城銅像

写真７　修復された正門

写真９　劉志丹像

写真８　新たな紀念碑と修復された東大冢

写真 10　新たに編成された「歴史記憶」の展示と内部の解説
常設展となった「革命公園革命歴史写真展」

内部は、古写真、碑文拓本、人物紹介と絵画による歴史再現からなる

写真 11　謝子長像の説明を読む人々

写真 12　現在の公園での様々な活動

「広場舞」

「歌唱隊」

結婚相談所の情報を見る人々

健康器具を使う老人たち

木陰でくつろぐ人々

（写真 2～12 はいずれも筆者撮影）

謝辞

本研究を実施するにあたり、公益財団法人 JFE21 世紀財団によるご理解、ご援助を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

また、このほか、行政文書の閲覧にご協力いただいた陝西省檔案館、西安市檔案館、陝西省図書館、西安市図書館、革命公園事務所、ならびに、取材に応じてくださった公園利用者、近隣住民の人々に、この場を借りてお礼申し上げる次第です。